



宮崎でもっとも小さな村。

村民の暮らしを

支えてきた柚子栽培



今もなお里山の暮らしが残る西米良は、人口1000人程度の宮崎県でもっとも小さな村です。古くから山と共に暮らしてきた西米良の人々にとって、山の中で育てる柚子は村を代表する農作物であり、生活を支えてきた大切な食べ物でもあります。元々林業が盛んだった西米良村ですが、時代の流れと共に衰退。そこで「何か西米良の特産を作れないか」と取り組み始めたのが、村の家々に実がなっていた柚子の栽培でした。村内でゆず振興部会が発足し、村の産業としての基盤ができて約50年。平成21年には柚子団地を開設し、安定的な生産と品質の向上に取り組んできました。



自然の中で育つ。

だからこそ、

知恵と工夫を凝らして



西米良の柚子は収穫のタイミングが年に2回あり、青柚子は7月下旬から、黄柚子は11月ごろから収穫し始めます。とはいえ、農家の方々の仕事は収穫が終わったらおしまいというわけではありません。それ以外の季節には樹形の管理をしたり、加工品を作ったりと、皆さん一年中忙しく働いています。また、時には獣害に悩まされることもあるのだそう。猿が人間のように皮を剥いて柚子を食べてしまったり、鹿や猪は柚子そのものは食べなくても、芽や根っこをむき出しにして木をだめにしまったりすることも。西米良の柚子農家の人々は、そんなさまざまな困難に対して工夫を凝らしながら、産業を守り続けてきました。

